【第１グループ】

第４回　陸前高田市新しいまちづくり市民会議

開催日時：H25.12.19（木）

開催場所：陸前高田市庁舎４号棟第４会議室

【第１グループ】

（1）参加者

第１グループ参加者名簿

氏名	所属	備考
村上　清	Ａｉｄ　ＴＡＫＡＴＡ	
三井　俊介	特定非営利活動法人　ＳＥＴ	
紺野　文彰	通訳ガイド	
松本　直美	陸前高田市観光物産協会	
小野寺　浩樹	いちのせき市民活動センター	グループ進行
吉田　真	陸前高田まちづくり協働センター	グループ記録

（2）第４回の目標とゴール

【目　標】「分野毎の提案を磨き（ブラッシュアップ）、より具体化する」

・○○○をするため、○○○する

・「いつ、誰がする」のかを考えることで、内容を深める。

【ゴール】それぞれの項目（スロット）ごとに優先順位（1 位～10 位）をつける

（3）2020 年までのビジョン（上位目標）

【 テーマ 】産業・観光

【ビジョン】「世界に誇れる陸前高田物語をつくろう！」

～古き良きものを残し、世界の最先端を進むまちへ～

○高田が誇れる「歴史背景」、「自然環境」、「景観」を、市民が理解し、後世へ伝えてく

○高田にしかないオンリーワンのものを、観光・産業と抱き合せて世界へ発信する

○外からの目線を取り入れて、新しいものを吸収し、最先端の魅力あるまちへ！

（4）ビジョン実現に向けた具体的なアイディア

◎産業・観光分野に発展させるために、高田のことが好きな人、他の地域と比較できる人、人と人とをつなげることができる人、高田が誇れるものを発信できる人の、４つの人材をコミセン単位で育てていく。（ひとづくり）

◎高田の良さをまずは市民に知ってもらうために、まずは高田が誇れる歴史背景や自然環境といった地元学を、市民が学べる場をつくる。（しくみづくり）

◎他地域との産業の競争や差別化を図るため、来訪者や高田出身の遠方在住者が、高田の良い所も悪い所も本音で語れる場をつくり、高田の産業を 6 次産業化していけるようなビジネスアイデアを出していく。（しくみづくり）

◎障がい者や高齢者が 70～80 まで働けるまちにするために、得意分野を活かした活動ができるしくみをつくる（しくみづくり）
◎何度でも高田に来訪してもらうために、地元の人と外から来た人をつなぎ合わせるコーディネーター役と、まちの魅力を発信するプロモーター役が活動しやすい制度をつくる。（しくみづくり）
◎産業・観光分野に限らず、市民がまちづくりに対してアイディアを出せる話せる場をつくる。（かんきょうづくり）

（5）検討概要

※第 4 回市民会議の進め方について

今まで出てきた分野ごとの提案を一度じっくり読み返し、「ひとづくり」の分野から 1 つずつ確認をしていった。また、提案項目を 1 つずつ吟味していく前に、産業・観光分野の「上位目標」を明確にすることで、その目標を達成するための提案項目とは何か？何が必要なのか？自分達でも出来ることは何か？といった具体的な内容を考えていけるのではないかということとなり、話を深めていった。

<u>＜産業・観光分野の上位目標＞</u>

・産業・観光のそれぞれ項目をグループで討議していく前に、産業・観光分野の将来像をグループ内で共通認識する必要があるのではないか。まずそこから決めていったらどうか。
・第 1 回市民会議の議事録の中にある、高田にしかない世界に誇れる価値あるもの、オンリーワンのものから、産業・観光分野の良さを発信していけばいいのではないか。
・高田にしかないものといえば、歴史背景、自然環境、景観など。
・何事にも上位目標があり、目標を達成するために、ひとづくり、ものづくり、かんきょうづくり、しくみづくりといった項目があると考えられる。

・産業・観光分野における上位目標とは、「世界に誇れる陸前高田物語をつくろう」
→上位目標であるし、キャッチフレーズとも捉えられる。
→世界誇れるものとは、高田にしかない歴史背景、自然環境、景観など。
・古き良きものを残し、世界の最先端を進む！そんなまちにしていきたい。
→そのためには、どんな人が、どんな仕組みが、どんな環境が必要なのかを考えていこう。

<u>＜ひとづくり・観光＞</u>

○どういった方が観光分野に必要なひとなのか？

１、地元が好きな人

・高田の良さを語れる人ではないと、相手に知ってもらえない。
・高田に誇りを持てる人材を育成するための、教育制度を制定したらどうか

２、他の地域と比較できる人

・高田では当たり前になっているものが、外部ではそうではないものが多い（特に海産物系）
・高田の内部だけではなく、外からの目線や意見を持っている方が必要。
・高田出身の県外在住者、高田に訪問しに来る方などから、改めて高田の良い所や悪い所を本音で聞ける場所づくりがあればいいのではないか。
・外からの意見を素直に受け入れる体制も必要だし、その体制を市民がどう意識するのかも重要。

３、間をつなぐ人（コーディネーター）
・地元の人と外から来た人をつなぎ合わせる役が必要

４、外へ発信する人（プロモーター）
・高田の歴史背景、自然環境、景観などを語れる人
・震災のことも語れる人
※1～4 のことは市民レベルで出来ることであり、自分達の判断で進めていけるものでもある。
→高田を好きになってもらう、他の地域と比較する、間をつなぐ、外へ発信をする行為に対しては、誰かの許可が必要なわけではない。
→市民レベルでおこなうための仕組みや制度づくりは、行政にお願いすることもある。

＜ひとづくり・産業＞
○どういった方が産業分野に必要なひとなのか？
・大前提として、産業を生みだせる人が必要
→そして、高田ならでは地域資源を活用できる企業家・起業家が必要。
・観光分野と一緒で、1～4 までの人は必要であり、すべて市民レベルでおこなえること。

・現状、高田の産業は 6 次産業になりやすいものが多いように思う。
・震災が 1 つの契機として 6 次産業化しているものもあるが、元々要素があったのではないか。
・高田の産業も、他の地域と競争関係にある。皮肉なことに震災によって注目を浴びてしまったが、この注目がいつまで続くかは分からない。産業の競争に勝つためには、ビジネスアイデアや他地域との差別化が必要だ。そして、そのための人材も育成していくべきだ

＜ユニバーサルマナー・福祉産業＞
・将来に対して不安を持って生活をしている方（特に高齢者や障がい者）の不安を解消するためには
→高齢者や障がい者といった分け隔てをしない人、心根の美しい人が必要。
→収入創出につながる産業づくりも必要。
・障がい者や高齢者の雇用創出をするために、誰もが分け隔てなく活動できる就労施設をつくる（かんきょうづくり）

・高齢者や障がい者の得意なことを活かした産業を生み出す（福祉産業）（しくみづくり）
→生み出したものを知らしめる人が、間をつなぐ人（コーディネーター）や外へ発信する人（プロモーター）であり、その役目は市民である。
→市民全体へうまく認知してもらうための仕組みづくりなどは、行政にお願いしたい。

＜ひとづくり・コーディネーター役をつくる＞
・間をつなぐ役目として、市内には様々な組織が存在している。例を挙げると○○協議会などといった組織は、コーディネーター役の機能を持っている。
→しかし、実際はコーディネート機能がうまくいっていないところや、コーディネート機能まで手が回らないところもある。
→間をつなげるコーディネーターとなる存在、間をつなげるために双方の背中を押してあげる存在が必要ではないか。

【第２グループ】

第４回　陸前高田市新しいまちづくり市民会議

開催日時：H25.12.19（木）

開催場所：陸前高田市庁舎４号棟第４会議室

【第２グループ】

（1）参加者

第２グループ参加者名簿

氏名	所属	備考
松田　邦子	陸前高田市女性団体協議会	
及川　満伸	陸前高田市消防団	
菅野　学	陸前高田市青年団体協議会	
永田　宗義	吉田燃料店ガス事業	
武蔵　和敏	会社員	
武蔵野　美和	主婦	
黄川田　美和	陸前高田まちづくり協働センター	グループ進行
佐々木　牧恵	いちのせき市民活動センター	グループ記録

（2）第４回の目標とゴール

【目　標】「分野ごとの提案を磨き（ブラッシュアップ）、より具体化する」

・○○○をするため、○○○する

・「いつ、誰がする」のかを考えることで、内容を深める。

【ゴール】それぞれの項目（スロット）ごとに優先順位（1位～10位）をつける

（3）2020年までのビジョン　（事務局案）

【 テーマ 】地域・防災コミュニティ

【ビジョン】地域力の向上が防災意識の向上と防災教育につながり、
防災や減災の観点から伝えていく事が出来る仕組みづくりと環境づくりを進める

（4）ビジョン現実に向けた具体的なアイディア

◎コミセン力を高めるために、サポートと資金面での協力を得ながらひとづくりをすすめる
（ひとづくり）

◎観光客にもわかりやすい避難誘導のために、外部から来た人にアンケートを実施し反映させる
（ものづくり）

◎防災意識を高めるために、行政と地域が支援の力を活かして総意の形を見出していく
（しくみづくり）

◎消防団、自主防災、女性団体の活動の連携の為に、横のつながりも見直しをしていく
（しくみ）

◎まちづくりを人任せにしないために、一人一人の意識を変えていく
（ひとづくり）

◎これからのコミュニティづくりのために、出来始めたコミュニティや地域をモデルにする

（かんきょう）

（5）検討概要

今回の進め方を確認し、カテゴリー分けされたシートの確認

【地域コミュニティ・防災】

ひとづくり（人材、組織、リーダー）

◎地域のお祭りを残して行くために、祭組とも捉えられる消防団の力が必要

・祭組…基本は郷土愛だがそれをどうするか

・祭り以前の問題

・祭り=表現が難しい（祭りだけが人を育てると思えない。）

・消防団の力が必要=消防団の大切さはすべてに出て来ている（みんな感じている）

・女性団体も必要=女性団体の活躍も大切だった（避難所などで）

※現状として女性の力が必要な事は感じているが人達がバラバラになってしまった事に対しての難しさはある。

・消防団から見た女性の必要性。昔はお茶くみといわれたこともあるが今は違う。

・災害時における地域コミュニティの中での各種団体の大切さ

・被災者がどんどん分散してしまっている。

→避難していた時は地区単位が基本となっていたが、仮設住宅に移る際に今までのコミュニケーションが崩れてしまったところがある。

※仕方ない事も頭では分かってはいるが今までとの違いと生活に追われコミュニケーションをとる事の難しさが表面化してしまっている。

※仮設住宅のコミュニティはなりえるのか？

→行政とは違い地域住民で動ける団体が必要

事例として

≪長部≫

→消防団婦人部が活躍してきた。

※自分たちで活動できるところはコミセンの傘下にあっても、時として特化した団体になってもいいのではないか？

※自主防災組織

→物資配布や炊き出しなどでの動きが、行政よりも早く動く事が出来ている。

※消防団、自主防災、女性団体など各々に動くよりも連携をしながら再編していってはどうか。

・祭りとは

→あくまで一つのきっかけでしかない。

→祭りを通じて人とのつながりを感じるためのものと考えている。

→七夕に限らない、各地で行われているもの

・震災後

→人づきあいが嫌になってしまった人も多いはず。

→アパートが多く立ち始めると余計に付き合い方が今までとは違いコミュニケーションの取り方が違ってくる。（知らないもの同士きっかけがないとつながらない。つながる事が自分達からでは難しいと感じる事がある）
・コミュニティに関して
→行政はコミセンに任せたいと思っている（コミセン主体で動いてきた経緯がある）
→地域はコミセンが中心になり、つくってきたからこそ、今後も中心となっていく事が望ましい。
→これからの地域が成長して行くためにはコミセンの長にかかってくる（運営側）
※コミセン力を高めなければいけない（中心となっていく人達を育てていかなければいけない）
※今の状態では人を育てることは難しい
※現状を支え地域の中心となって動く事が出来る人達を育てていくためにサポートが必要
※サポートしてくれる人達が必要
※コミセンにお金を払ってもいいのではないか（サポートしてくれるところがあれば）
※地域それぞれの得意分野を活かして伸ばしていくシステムが必要

事例として
≪今泉≫
→コミセンの中心となる人達はまちづくりに参加していなかった。
※自主防災に関しても活動に力を入れてきた。しかし避難場所の設定は難しい。
→住んでいてもまさかの事態に備える事が難しい。
※そんな中、避難方法に関しては完璧だってと感じている。
※実際は青年部が引っ張ってきた経緯がある。
※人任せではまちづくりはできない。
※一人一人の考え方が変わらなければいけない。
・コミュニティは、いつならできるのか
→場所によると感じている
→すでにできているところもあるがこれからのところも多い
→出来ている地域やコミセンにモデルになってもらう事は出来ないだろうか。
※コミセンのマネージメント
→お金を払っても人材を育てていかないとせっかくの制度が生かされない。
・ハード面にも関わってくるのではないか

【ものづくり】
◎防災意識を高めるために、行政と地域住民が一緒になって考える防災マップを作成する。
◎防災意識を高めるために、子ども目線、高齢者目線、障害者目線、工事事業者目線で防災マップを作成する。
・以上２点については一緒に考える
→体験を何かの形で生かしていく事は出来ないか
※体験が何より大切なはずもっと知る事が今後につながる
→防災マップ＝避難所
※避難所の確立のために
・外から来た人（観光客）にもわかりやすい矢印が必要

→アンケートをとって反映させてはどうか？
一目でわかるもの看板が必要
→矢印を使って避難誘導を促す看板をとにかく早く作ってほしい。
※声掛けすれば今高田の支援に入っている団体の皆さんとやっていく事は出来ないだろうか？
（自分たちの声を形にして欲しい。）
※看板デザインとして
→ゆめちゃんが逃げているマークなどを考えてみてはどうか
→どこが高台なのかをはっきり知らせる。
→移動手段として考えられる車に関してどうすればいいのか？

現状として

・45 号線や三陸自動車道はダンプで混雑している。ダンプ以外の車は今のままでは逃げる事が出来ない。
→ダンプ専用の逃げ道が必要だと感じる
→現状を踏まえてどう逃げるか考える事が必要だと感じる
※たとえばトラックなどでは渋滞する事は目に見えている。
→仮設住宅に住んでいる人達は仮設住宅単位で考える
→トラックはトラックの会社のつながりで考えるほうが早いのではないか
※行政がやるべきか
※行政では難しいのではないか
→市民と行政が一緒に考える事でどちらに責任があるという事にならないのではないか
→行政から町内会に向けて提案（旗振り役）がいないと同じ方向を向いて進むことが難しいと感じている。
※これからの町内会を作っていく段階になってきている。
→防災組織を必ず作る事が交流につながる（みんなが若干の差はあっても考えている事だから）

・自分の命は自分で守る
→防災訓練では集合し点呼をとる事があるが、点呼を無視しなければいけない事も頭の片隅に感じていく事が必要。（点呼をとる場所が低い場所に設定されている事もある
・住んでいる場所に合わせた訓練をする事が必要
→山側に住んでいる人は山側の避難や防災について、海側に住んでいる人は海側の避難や防災について考える。
※住んでいる場所によって災害の対象が変わってくる
※住んでいないとわからない、危ない場所やその災害に対しての防災の方法が違っている
→教科書通りにはいかない事は今回の津波で痛いほど痛感したはず。
→しかし地域に「防災マニュアルを作って下さい」では差が出てきてしまう。その差を補うために作ったものをチェックし、より良いものにしていく作業が必要となってくる。
→行政から出されたものに関して常に受け身ではなく。情報に関して自分達の事だからこそもっと関心を持ち考える場が必要。
→地域や市の事を考えて作られているものだが、より使いやすく住んでいる側の意見や声を盛り込んでいく事が必要なのではないか。（受け身ではいつまでたっても批判にしかならない）
・高田ではあまりやっていない

→避難所だった所に津波が来てしまったことから市としてはどう考えているだろうか
※記録に残さなければいけない
※みんな声に出来ない（我慢している部分がある）
・レベルに合わせた体験をする事で意見を集約していく事が必要。
→多くの方が集まって考え、決めていく事が必要
※防災意識が薄れてきている
→とにかく「やりましょう」との声を上げる事が必要
→急いで進めて行かなければいけない。
→今まだ防災意識があるうちに声をあげて活動につなげていかないと同じ事の繰り返しをしてしまう。（繰り返したくないからこそ声をあげ活動につなげる）
→子供たちの意識も今後重要となってくる。

【かんきょう】
※ものづくりとつながる部分が多い
◎震災後のコミュニティ環境を改善するために、地縁コミュニティ構築に向けた仕組みづくりを行う。
→新しいコミュニティが出来た時の事だと感じる。
→楽しくないと人が集まらないのはコミセンでの行事に関しても同じ。
※順位ではなくどの話をとても全てがつながっていく事だと思う。
・震災前は町内会の青年部、婦人部が、がんばるしかないと感じているがでも今は違うのか？
・メモリアル公園についての事について知りたい
※実際に被災していないため、思いとしてはわかるが、今もこれからも変わらない生活を送っている。そのため、これからの事に関して情報を収集していきたいと考えているが、わかりにくいことから、このような会議で情報の交換が出来ればと感じている。

※全体を見て話をしていく事が必要だと感じる。
一つ一つ話し話していく事も大切だが全体につながる話だと感じてきた
このまま一つ一つ項目で話す事への心配
※祭り一つをとっても大切な事はもちろんわかるがそれだけにこだわらず町全体で考えて行ったほうが良いのではないだろうか。
・今のコミュニティとして考えるのか
・これからのコミュニティとして考えるのか
→考える事は同じ項目となるのかもしれないが、今とこれからでは違いが生まれてしまう。

【第３グループ】

第４回　陸前高田市新しいまちづくり市民会議

開催日時：H25.12.19（木）

開催場所：陸前高田市庁舎４号棟第４会議室

【第３グループ】

（1）参加者

第３グループ参加者名簿

氏名	所属	備考
伊藤　昌子	おやこの広場　きらりんきっず	
石川　浩行	青年会議所	
太田　明成	飲食店経営	
坂井　ふき子	教員	
三浦　まり江	陸前高田まちづくり協働センター	グループ進行
佐藤　大輔	いちのせき市民活動センター	グループ記録

（2）第４回の目標とゴール

【目　標】「分野毎の提案を磨き（ブラッシュアップ）、より具体化する」

・○○○をするため、○○○する。

・「いつ、誰がする」のかを考えることで、内容を深める。

【ゴール】それぞれの項目（スロット）ごとに優先順位（1位～10位）をつける。

（3）2020年までのビジョン（事務局案）

【 テーマ 】教育・子育て

【ビジョン】地域と行政が一緒になって、体験等を通して楽しみながら、地元の資源（人材、歴史等）を活用しつつ、地元のことを知る「高田学」教育を全市体制で導入したい。

（4）ビジョン実現に向けた具体的なアイディア

◎人口の流出を防ぎ、外に出た若者に戻ってきてもらうための方策として、まずは足元を固めるために地元のことを知る機会を取り入れる。（かんきょうづくり）

◎職場体験等を通じて、自分のまちにどんな仕事があるのかを知り、将来の選択肢に幅を持たせる。（ひとづくり）

◎支援や職場体験を通じて色々な仕事に触れる機会を設け、それらの体験を通して視野を広げる。（ひとづくり）

◎地域の大人たちとの交流の場を設定、活用し、体験と学びの中から緊急時に使える技を身につける。（ひとづくり）

◎スポーツ少年団を活性化させ、他の学年、スポーツ団体、地域との交流の中でコミュニケーション方法を学び、社会に出る前に礼儀を学ぶ。（ひとづくり）

◎自分たちのまちを知るために、地元検定を導入する。（ものづくり）

◎職業の選択肢を増やすために、市内全部を使ってキッザニアをする。（しくみづくり）

◎産業・歴史・お祭りなどの伝統と地元教育、防災をカバーした副読本を作り直し、義務教育 9 年間の学校の授業に取り入れる。（地元教育カリキュラムの作成）（しくみづくり）

◎地元の人材と教育を結び付け、好循環の仕組みを働かせるために人材データベースを構築、管理する。（しくみづくり）

◎世代間交流を促進するために、「スポーツ少年団」を通じたこども時代からのコミュニケーション方法の習得を図る。（しくみづくり）

◎スポーツ少年団の新たな仕組みとして、低学年には好きなスポーツをさせ、中学年以上には体験した中から好きなスポーツを選択させることで、スポーツに選択肢を用意する。（しくみづくり）

（5）検討概要

【テーマ】教育・子育て

・人口の減少を食い止めたい。そのためにできることは何か？

・視野を広げるために外に出た若者が結局戻ってこないという事態を避けたい。

・戻ってきてもらう、留まってもらうためには何が必要か。

⇒地元を知る事が第一。地元を知るために地元の人材を活用する。

＜ひとづくり＞　＜しくみづくり＞

➢「職業選択の幅」

・実際市内にどんな仕事があるのかわからない部分がある。体験を通して知ってもらう事から。

・仕事をしてくれる人が足りないところでは、職場体験でも助かるという声もある。

・支援や職場体験を通じて色々な仕事に触れる機会を設け、それを通して視野を広げる。

・1 次産業はこういう言葉を用いる場合には含まれないケースがある。選択肢を増やす前に足元を固めることから始めるべき。

➢「社会の視野」

・まず地元の視野を広げる。例えば親がどんな仕事をしているか、高田にある農業、林業等既存産業のいいところなど。

・高田の産業、歴史等が載っている教科書が既にある。それを活用。

・飲食店で働くことを体験するだけでも、設備、調理、接客等いろいろな仕事に触れられる。

・地元で働かないと、足りないものが何かもわからない。

・イベント等で見て、体験→まずは楽しむこと。楽しみながら地域を知り、体験する。

➢「防災」

・体験を通して緊急時に使える技を身につける。

・先人の知恵から学ぶ。

・教える側に立つ人を誰が探すのか？⇒**地域のネットワーク**

→子どもが来ればお年寄りも来る。

→前のコミュニティがバラバラになっていて、誰がどこにいるかわからない。

・人材データベースが必要。

→それぞれのコミュニティで「こんな人がいる」と紹介。地域の職人等を広報で紹介するなど。

→「ここに行けばわかる！」という窓口があればいい。（ここは行政に担って欲しい）

➢「地元を知る」

・自分たちのまちを自分たちで作っていく意識をもつ。

・学校だけで教えられないことは、地域の子ども会で体験させる。
[新規提案]
◎市内全部を使ってキッザニアをする。
◎地元検定を導入する。
◎学校の授業に取り入れる。（義務教育の小学校６年間＋中学校３年間）
→産業＋歴史＋お祭りなどの伝統と地元教育、防災をカバーした副読本を作り直す。
役割分担
テキスト・カリキュラム（人材データベース）：行政（編集委員会をつくるなど）
先生役（教える人）・生徒：市民（地域住民、教員、子ども達）
⇒**「高田学」を全市体制でこの機に取り組む！**

＜かんきょうづくり＞
➢「飽きずに」
・飽きずに楽しむためには？→ソフト面は支援がある。ハード面の整備を先に。
→ホールがあれば市民劇団もできる。
・ゲームが無ければ運動する→家庭内でルールを作る。
→親を啓もうする活動＝親の育児力を上げる。
⇒家庭内教育の環境が整っている＝親の教育力が高い
・「与えられる」のではなく、自主的にやるためには何が必要か？
→集団で遊ぶ、コミュニケーションの方法を知らない。経験させなければわからない。
⇒世代間交流が大事
➢**「スポーツ少年団」**を通じた学び、コミュニケーション方法の習得
⇒子供たちは何かしらのスポーツをしている。スポ少では他の学年と交流。コミュニケーションが取れるし、また礼儀を学ぶこともできる。
・スポーツ少年団をより活性化させる。
⇔逆に、年に１回くらい全市で「遊ぶ」日を設ける。
・他のスポーツの少年団と交流させる。
・低学年から参加させる。
◎スポ少の新しい仕組みの提案：
低学年→好きなスポーツをさせる
中学年以上→体験した中から好きなスポーツを選択させる。

【第 4 グループ】

第 4 回　陸前高田市新しいまちづくり市民会議

開催日時：H25.12.19（木）

開催場所：陸前高田市庁舎 4 号棟第 4 会議室

【第 4 グループ】

(1) 参加者

第 4 グループ参加者名簿

氏名	所属	備考
菅野　好子	気仙地域障がい者自立支援協議会	
熊谷　克郎	陸前高田市社会福祉協議会	
金澤　忍	えぇ町つくり隊	
細谷　一		
酒井　菜穂子	陸前高田まちづくり協働センター	グループ進行
鈴木　麻里子	陸前高田まちづくり協働センター	グループ記録

(2) 第 4 回の目標とゴール

【目　標】分野ごとの提案を磨き(ブラッシュアップ)、より具体化する。

・○○○をするため、○○○をする。

・「いつ、誰がする」のか考えることで、内容を深める。

【ゴール】それぞれの項目（スロット）ごとに優先順位（1 位～10 位）をつける。

(3) 2020 年までのビジョン（事務局案）

【 テーマ 】医療・福祉

【ビジョン】ノーマライゼーションという言葉が要らないように、障がいの有無、年齢、性別に関係なく誰もが日常生活のなかで交流ができ、各世代が役割をもって教育や高齢者サポートなど様々な場面でタイアップし、福祉・医療サービス窓口が一本化されて必要な情報が市民に適切に届くまちにする。

(4) ビジョン実現に向けた具体的なアイディア

◎ノーマライゼーションのいらないまちを実現するために、ノーマライゼーションを盛り込んだ条例を策定する。（しくみづくり）

◎医療・福祉サービスを向上させるために、関係団体間の情報共有のしくみ・システム・機能を、専門家も交えて作り、横のつながりを強化する。（しくみづくり）

◎在宅診療を充実させるために、医療・福祉サービスを提供している人/団体が連携しテレビ電話などで対応できるようにする。（しくみづくり）

◎災害公営住宅、医療過疎地区での医療体制を充実させるために、退職した医療従事者・専門家を配置する。（しくみづくり）

◎市民の声を医療・福祉に反映していくために、話し合いの仕組みづくりや、気軽に話し合える場を作る。（かんきょうづくり）

◎年齢や障がいの有無に関係なくさまざまな人が交流していくために、誰もが他人（ひと）と違っていて当たり前という考え方を浸透させる。（ひとづくり）

◎市民が医療・福祉サービスに適切にアクセスできるために、窓口を一本化し、学校統合により空く可能性の高い学校施設に、医療・福祉に関する情報が全て入手できる総合センターを作る。（ものづくり）

(5) 検討概要

〇テーマ「医療・福祉」進め方

・「ひとづくり」「ものづくり」「かんきょうづくり」も大事だが、「しくみづくり」をしなければ何も決められない。よって、「しくみづくり」から話し合いたい。

・「ノーマライゼーションという言葉のいらないまち」や「バリアフリー」についての計画は決まっていないが今から取り組むことが必要。

【しくみづくり】

し-1　ノーマライゼーションという言葉がいらないまちを実現するために、ノーマライゼーションを担保する条例を作る

し-2　施設の建設等に統一感を持たせるために、バリアフリーについても専門家や障がい者・高齢者の意見を取り入れながら統一感を持たせる

⇒条例について

・「ノーマライゼーションのいらないまち」にするためにはどうすればいいか。
　→まずはノーマライゼーションを進めていくための条例を制定していく必要がある。

・市民の意見を取り入れる条例の制定。
　→その進め方を、市民がきちんと見ていけるシステムを取り入れる。

⇒これらを考えていこう、というしくみづくりが大切。

・条例をつくるための発議
　→市議に提案をする
　→市の民生関係へお願いする。

市民会議として提案

≪なぜ？・何が理想？≫

・今行われている諸々に、市民の声が入っていない。

・設計段階に入る前に、一度市民に話を聞くという条例を作る。

・担当者自体が実態を知らないままに進めている。市民からの意見を持っていければいい。

し-3　高田を「高齢者・障がい者にやさしいまち」にするために、高田独自(高田のニーズに合わせた)の医療、福祉体制を作り上げる。

し-4　陸前高田を「高齢者・障がい者にやさしいまち」にするために、高田独自(高田のニーズに合わせた)の医療、福祉体制を作り上げる。

⇒横のつながり・連携・在宅医療などについて

≪横のつながり・連携≫

・福祉サービスの窓口の一本化については、いろいろなところで話し合われている。サービスの関係上、陸前高田単独では難しいが、これから重要になってくる。
　→気仙管内という枠で、窓口集約の構想が考えられている状況。
　→行政側・市民側どちらの提案かと言われれば、市民側（福祉団体）からの提案。運営を福祉団体が行うことで検討中。

・いろいろな福祉団体があるが、横のつながりができていない。情報共有できるしくみ・システム・機能が必要。
　→個人情報保護に気を付けながら、取り組めそうな部分についてのたたき台を専門家に作ってもらえないか。

・教育機関との連携も必要。

・情報発信の重要性…この地域の人たちは、民間も行政も長けてはいない。福祉サービスの詳細につ

いても必要な情報が適切に届けられていない。
●場所…知らなくて利用できないこともある。
●申請制…申請しないと、どうにもできないし、どうしようもないという状況がある。
●制度…制度を知らない家もあるかもしれない。

⇒陸前高田に住んでいる市民が円滑に情報を知ることができるといい。
・管轄の違いにより、行く先々で何度も説明が必要になる。
→母子手帳のように、生まれた時からの障害の状況が分かるものがあるといい。
→市民カード(ＩＤカード)など、市内の公共施設ではそれひとつでわかる！というものがあるといい。

・いろいろな病院にかかっている人に対応するために、開業医と県立病院の間では、データ(カルテ)の共有がされ始めているらしい。

≪在宅医療≫
・高田病院の石木先生が行っている「在宅診療」は、入院しなくても在宅で厚いケアをしている。
→動けなくならないように、動けなくなってもまた動けるように、という活動をしている。
・サービスを提供している人たちで連携できるのではないか。
・石木先生だけでは「訪診」は大変なので、テレビ電話みたいなもので対応できないか。
・個人情報保護の壁はあるし、行っていくのであれば運用ルールも必要。

≪市民として≫
・地域コミュニティで話し合っていくことが基本だが、あまりうまく機能していないため、話し合いの場に慣れていない。
→機能するためのしくみを作っていく。
→地域で気軽に話し合える場を作る。

・若い障がい者の話を聞き、意見を取り入れる
→若い世代で障がい者手帳を持っている人はごくわずか。高齢者に偏っているため、若者の意見を取り入れづらい。
→理解してもらうまでに時間がかかるだけでなく、表に出ること自体が心の痛みを伴うので、当事者は躊躇する。
→いかに世の中が受け入れてくれるか。

・議会だよりの質問、答えは具体的
→なぜだめなのかという理由も出ているため、そこに挙げれば目に見える形で進んでいくのではないかと思われる。
福祉分野では保育所が、医療分野では高田病院についてが書かれていた。

【かんきょうづくり】

か-3　介護問題・DV・孤独死などに対応するために、些細な相談が気軽に、かつ一か所ですべての相談業務を受けることができる総合的なセンターの設置を検討する。

→施設を作ること自体は「かんきょうづくり」だが、総合的なセンターの設置は「しくみづくり」と繋がる。

・保育園とデイサービスの併設について
→併設により、風邪などの感染率が高くなるという声があった。この危険を考えると、離したほうがいいのではないか。
→世代間で同居していれば必ずそのリスクはあるので、診療所も併設することでリスク回避できる。
→保育施設が震災被害にあっていたり、浸水区域にあったりするので、早急に考えなければいけない問題。

→他県では、高齢者デイサービスと障がい者の施設が、ビルの中に一緒に入ってうまくいっている例がある。

【かんきょうづくり・しくみづくり】

・高田の学校は将来的に統合になる可能性が高いので、空いた建物に「医療・福祉について、そこに行けば何でも分かる/行っている」場所＝総合センターを作れないか。
→現在、人の集まりが多く、まちになりつつあるあたりの中に2か所くらい作ると、高田市内どこからでも行ける。
・市役所に行かないと何もできない
→コミュニティセンターに行政職員が数名常駐し、そこに行けばとりあえず何でも対応してもらえるというのは理想。
→住民カードのようなものがあれば、都会では役場でなくても住民票などとれるシステムになっている。
・保育園・幼稚園・小学校から、いろいろな人と交流できるといいのではないか。
→（他の人と）違って当たり前　という考え方をする。